

日系新聞にみられるブラジルサッカー史像の変遷

— 柳 貴 博

キーワード：スポーツ観、ブラジル、日系新聞

1. 研究の動機と目的

19 世紀末以降のブラジルにおけるサッカーの歴史的展開は、貧困や人種問題、階級的な社会環境といった背景と密接に関連していた。その一方で、ブラジルサッカーには、喜びや驚きを伴うプレイ、魅力的なサッカーが求められ、特異な歴史像が形成されてきた。筆者は、スポーツの捉え方への関心から、後者に大きな関心を持った。本研究では、ブラジルサッカー史像の変遷を明らかにすることを目的とし、ブラジルにおける特異なサッカー観が、いかなる背景と実践の中で形成され、変容したのかを考察したい。

2. 先行研究の検討

ブラジルサッカーの歴史像に関する研究は、山本の「『ブラジル・サッカー史像』とプレイスタイルをめぐる言説との歴史的連関」が挙げられる。山本は、1) リオデジャネイロの黒人・混血選手に注目したローカルな見方、2) ブラジル社会を生きる国民（民衆）に注目するナショナルな見方、3) W 杯におけるブラジル代表チームに注目したグローバルな見方という、「プレイスタイルをめぐる言説」についての歴史的展開を明らかにしたが、具体的な言説の変容に関しては一部の言及にとどまっている。

3. 研究の課題と方法

本研究では、チームのスタイルや批評に特徴がみられることから、ブラジルサッカーの歴史像の形成に影響を及ぼしたと考えられる、以下の主要 3 大会を研究対象とする。

- 1) 1970 年 FIFA ワールドカップ
- 2) 1994 年 FIFA ワールドカップ
- 3) 2013 年 FIFA コンフェデレーションズカップ

また本研究の目的を達成するため、以下 3 点を明らかにすることを課題とする。

- 1) 批評に着目した言説の変容
- 2) 批評にみられるサッカー観
- 3) 3 大会を通してみられるサッカー観の変容
4. 主な研究史料

以下の日系新聞 4 紙を主要史料とする。

- ・サンパウロ新聞 1946 年出版
- ・パウリスタ新聞 1947 年出版
- ・日伯毎日新聞 1949 年出版
- ・ニッケイ新聞 1998 年出版

日系新聞はブラジルで発行されている日本語新聞である。現地の同時代史料であることや、各時期の記者、読者の見解を反映していると考えられることから、現地のポルトガル語メディアに近い情報を得ることができる有益な史料であると考えられる。一方、新聞発行に関する規制や日系人向けの新聞であることから得られる情報には制限がある。こうした性格に留意しつつ、上記課題を達成するための主要史料とする。

5. 本論

5.1 1970 年大会の検討

5.1.1 大会の概要

ブラジルは、今大会において、予選・本大会を通じて 12 戦全勝という圧倒的な強さで、史上初の通算 3 度目の優勝を果たした。

5.1.2 批評に着目した言説の変容

大会前は、チームの強さと弱さの両面に言及する報道がみられた。準々決勝では攻撃に関する肯定的な表現が多くみられ、準決勝では、試合前に「攻撃型」のブラジルと「守備型」のウルグアイの比較がなされた。大会後の報道では、多くの得点を挙げ全勝したチームに対する肯定的な記述や、欧州との比較の中で、個人技を生

かしたブラジルのサッカーを評価する記述がみられた。

5.1.3 批評にみられるサッカー観

守備的なチームや欧州各国との比較を通して見出したブラジル特異なスタイルを、結果へつなげることで確立させていった。今大会を通して、攻撃的や個人技といったスタイルで試合に勝つことを理想とするサッカー観が確立された。

5.2 1994 年大会の検討

5.2.1 大会の概要

今大会は、ブラジルが史上最多 4 度目の優勝を果たした大会となった。得点 11、失点 3 は過去ブラジルが優勝した大会の中で、ともに最小の点数であった。

5.2.2 批評に着目した言説の変容

大会前は、肯定的、否定的両方の批評がみられたが、引き分けに終わったグループリーグ第 3 戦では、現地メディアの痛烈な批判が記述されていた。大会後には、優勝を果たしたチームに対する肯定的な記述の一方で、守備的な選手を配置するシステムを採った監督に対し、国民の批判が集まったことへの言及がみられた。

5.2.3 批評にみられるサッカー観

結果が出ないことへの痛烈な批判から勝ちを求めるサッカー観が見出され、守備的な戦術への批判から攻撃的なスタイルを望むサッカー観が見出された。そうしたサッカー観は 1970 年大会におけるサッカー観と共通するものであり、批判を通して、1970 年大会に確立されたサッカー観が再確認された。

5.3 2013 年大会の検討

5.3.1 大会の概要

FIFA コンフェデレーションズカップは、各大陸の王者などが集う国際大会であり、ブラジルは 3 連覇を成し遂げ、翌年の自国開催のワールドカップに弾みをつける大会となった。

5.3.2 批評に着目した言説の変容

大会前はチームの不安点が多く記述されていたが、3 連勝を飾ったグループリーグでは、各選手の活躍を記述する記事が多くみられた。大

会後には、大会前の低評価が覆されたとの言説に加え、決勝におけるブラジルの完勝を印象付ける記述や、ブラジルの強さを評価する批評がみられた。

5.3.3 批評にみられるサッカー観

今大会では、スタイルに関して一貫した言説や批評はみられず、個人技や攻撃に着目する従来のサッカー観に加え、「剛健さ」や「威厳」といった強さに着目した新たなサッカー観形成の可能性が示された。

6. 結論

本研究において、1970 年大会では圧倒的な強さで優勝を果たしたチームを通して、個人技や攻撃的といったスタイルで勝つことを理想とするサッカー観が確立された。また 1994 年大会では結果や内容に関する批判を通して、1970 年大会でみられたサッカー観が再確認された。こうしたサッカー観は、歴史的な背景や、身体文化、国民性といった観点からも強固に形成されたサッカー観であると考えられる。

2013 年大会では、従来のサッカー観に加え、強さに着目した新たなサッカー観形成の可能性がみられた。自国開催となる 2014 年 FIFA ワールドカップを翌年に控え、2014 年大会への大きな期待が、強さに着目したサッカー観形成の一要因となっていると考えられる。

グローバル化や近代化の中で、ブラジルにおけるサッカー観の多様化がみられる一方で、セレソンと呼ばれ親しまれている代表チームに対しては、従来のサッカー観の継承がみられる。自国開催の 2014 年 FIFA ワールドカップは、結果が強く求められることに加え、ブラジルのサッカー・スタイルやサッカー観が再考され、変容していく大きな契機となると考えられる。複雑な環境を背景にサッカー観の多様化がみられる中で、2014 年 FIFA ワールドカップの前哨戦となる 2013 年大会の検討では、強固に形成された従来のサッカー観の継承と、結果への強い期待に起因した新たなサッカー観形成の可能性が示された。 (指導教員 秋元 忍)